

---

土地分類基本調査

---

家 山

---

5 万分の 1

国 土 調 査

静 岡 県

1 9 8 1

---

## 序 文

本県では、健康で文化的な生活環境の確保と県土の均衡ある発展を図ることを基本理念として、人間性豊かな地域社会づくりを進めております。

このためには、限りある土地資源を適正かつ有効的に利用することが極めて重要な課題となり、基盤である県土の実態を総合的に把握することが必要となります。

さいわい、国土調査事業ではこれに対応する手段として、土地についての質的調査を土地分類調査、量的調査を地籍調査、水関係の量及び質的調査として水調査、の三つの制度があり、この制度に基づき適正な土地利用計画を行うための基礎資料を作成しております。

本県においては、この制度を活用して土地分類調査を昭和45年度より14図幅、地籍調査を昭和28年度より902Km<sup>2</sup>の区域で調査を完了させ、更に水調査についても昭和55年度からそれぞれ実施しております。

本来、国土調査事業は前述の三つの制度が足並みを揃えることにより、総合的にその機能を果たすものでありますが、今日までの実施状況は、その事業進捗とあわせて、かならずしもバランスのとれた充分なものとはいえません。特に地籍調査については、市町村における土地利用に関する諸行政の企画、立案、事業計画の策定、事業にともなう用地買収等の基礎資料として広範囲に活用され、望ましい計画の樹立と事業の円滑な実施 能率の向上と経費の節減に大きく貢献する調査であります。

又、土地分類調査については、すでに完了した14図幅及び今回とりまとめた家山図幅等は、その地域における地形、地質及び土壌など土地に関する要素の特性を総合的に把握することによって、地籍調査の活用をはかると共に、各種土地開発、並びに土地保全計画等の基礎資料として市町村行政面に大きく貢献する調査であります。

従いまして、本調査事業の進捗アップが更に進展するよう、今後共、関係市町村各位の尚一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第でございます。

なお、本調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御協力をお願いする次第です。

## ま え が き

1. 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
2. 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査の実施、成果の作成機関および関係担当者は下記のとおりである。

総合企画調整編集	静岡県農地森林部 農地企画課	課長	東川光雄
		係長	小笠原勝彦
		主任	新田三次郎
		技師	山田忠志
地形調査	静岡英和女学院 短期大学	教授	北川光雄
傾斜区分調査	"	"	"
水系谷密度調査	"	"	"
表層地質調査	静岡大学理学部	教授	土隆一
	"	助教授	黒田直
	"	助手	茨木雅子
土壌調査	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	" 林業 "	主任研究員	縣富美夫
	東京農工大学農学部	助教授	浜田竜之介
土地利用現況調査	静岡県農地森林部 林政課	主任	渡辺光雄
	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	駒沢大学		山口一俊
協 力	東京農工大学農学部	教授	黒部隆
	駒沢大学	教授	長沼信夫

# 目 次

## 序 文

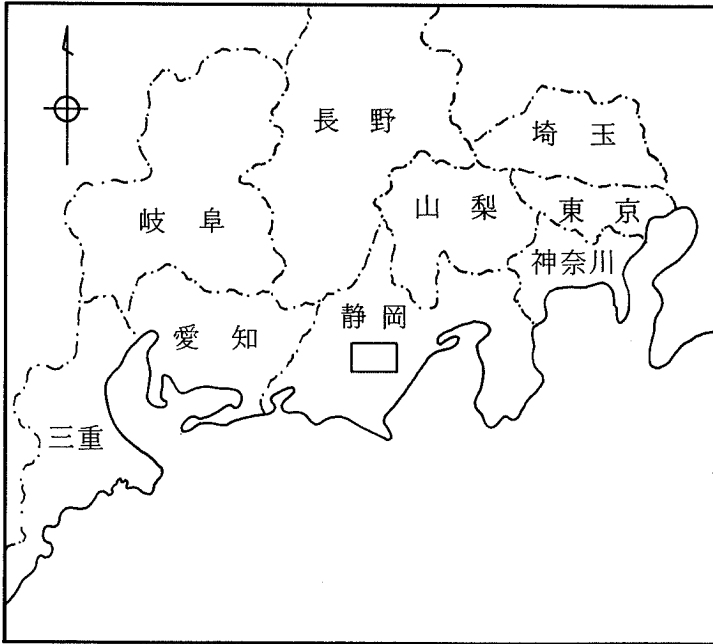
## 総 論

I 行政区画	1
II 人 口	2
III 図幅内の地域の特性	4
IV 主要産業の概要	9

## 各 論

I 地形分類図	2 1
II 表層地質図	3 5
III 土 壤 図	3 7
IV 傾傾区分図	4 5
V 水系谷密度図	4 6
VI 土地利用現況図	4 8

位 置 図



総

論

# I 位置及び行政区画

## 1 位置

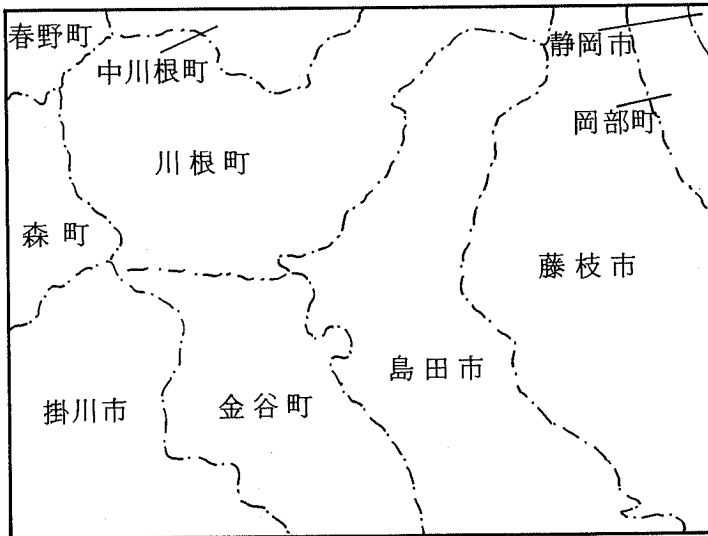
「家山」図幅は、静岡県中央部に位置している。

図幅内のほぼ中心集落である川根町家山は静岡市の西方約32Kmの地点にあり、一級河川大井川が図幅内中央部を南北に貫流する東経  $138^{\circ}00' \sim 138^{\circ}15'$  北緯  $34^{\circ}50' \sim 35^{\circ}00'$  の範囲で、図幅内面積は約  $423\text{Km}^2$  である。

## 2 行政区画

「家山」図幅に関係する行政区は、第1図に示す島田市、藤枝市、掛川市、静岡市、榛原郡金谷町、川根町、中川根町、周智郡春野町、森町、志太郡岡部町の4市6町が関係する10行政区である。

第1図 行政区図



第1表 図幅内

区分 \ 市町村名	島田市	藤枝市	掛川市	静岡市	金谷町	
市町村全体面積A(km <sup>2</sup> )	130.75	141.98	186.05	1,145.96	66.15	
図幅内 面積 {	陸地 B (km <sup>2</sup> )	93.6	99.7	45.8	0.4	46.3
	構成比 (%)	22.1	23.6	10.8	0.1	11.0
	B/A (%)	71.6	70.2	24.6	0.0	70.0

資料：市町村全体面積は、昭和54年度全国都道府県市区

注) 図幅内、陸地面積は、5万分の1地形図(国土地

## Ⅱ 人口

第2表 世帯数、

区分 \ 市町村名			島田市	藤枝市	掛川市	静岡市
昭和50年	人口	男	33,256	44,015	30,156	220,272
		女	35,564	46,343	31,575	226,680
	計(A)	68,820	90,358	61,731	446,952	
	世帯数	17,409	22,813	14,751	130,644	
昭和55年	人口	男	34,224	50,397	31,992	225,143
		女	36,481	52,828	32,851	233,198
	計(B)	70,705	103,225	64,843	458,341	
	世帯数	18,367	26,644	15,877	137,639	
比較増減	人口	男	968	6,382	1,836	4,871
		女	917	6,485	1,276	6,518
	計	1,885	12,867	3,112	11,389	
	世帯数	958	3,831	1,126	6,995	
人口伸び率 B/A			1.03	1.14	1.05	1.03

資料：国勢調査(10月1日現在)



市町村面積

川根町	中川根町	岡部町	森町	春野町	計	摘要
117.32	122.13	53.42	134.32	252.79	2,350.87	
88.2	9.5	14.1	16.9	8.2	422.7	
20.9	2.3	3.3	4.0	1.9	100.0	
75.2	7.8	26.4	12.6	3.2	18.0	

町村別面積調（国土地理院）による。

理院発行）より計測した。

人口

川根町	中川根町	岡部町	森町	春野町	金谷町
4,001	4,162	5,290	10,058	4,441	10,608
4,352	4,414	5,458	10,621	4,729	11,217
8,353	8,576	10,748	20,679	9,170	21,825
1,933	2,048	2,388	4,831	2,344	5,151
3,890	3,842	5,710	10,004	4,099	10,633
4,067	4,088	5,887	10,443	4,338	11,224
7,957	7,930	11,597	20,447	8,437	21,857
1,890	2,015	2,698	4,927	2,252	5,354
△ 111	△ 320	420	△ 54	△ 342	25
△ 285	△ 326	429	△ 178	△ 391	7
△ 396	△ 646	849	△ 232	△ 733	32
△ 43	△ 33	310	96	△ 92	203
0.95	0.92	1.08	0.99	0.92	1.00

### Ⅲ 図幅内地域の特性

#### 1 地 勢

本図幅の地域は、静岡県ほぼ中央部に位置し山地から平野への移行地帯にあたる。東部は焼津市で駿河湾にそそぐ二級河川瀬戸川の流域、西部は一級河川大井川の流域にあたり、そのほか太田川と天龍川の水系の地域が若干ふくまれる。図幅内は赤石山地の前山である志太、春野、安倍山地などの山地面積が広く標高967 mの夕日峠を最高点とする中山、低山性山地である。高根山（871 m）八高山（832 m）粟ヶ岳などの山地が有名であり、観光的要素も加えられ自然景観もとんでいる。

地質は中生界白亜系の四万十層群や新生代古第三系瀬戸川層群の頁岩、砂岩、粘板岩などからなり、南部の丘陵性の山地は砂岩、泥岩などで構成される新第三系の大井川層群や倉真層群からなり、地形的な差異が地層によって生じている。また貫入岩体で輝緑岩質の岩石も局地的に分布しているが、大まかな山系や水系の配列としては北東—南西方向の褶曲や断層の構造をもつ地質構造にしたがっているのが一般的傾向である。

砂礫の堆積する広い河原をもつ大井川中流は蛇行する曲流と段丘地形に特色をもち「鵜山の七曲り」などの河川の特長は、河岸の川根茶の栽培景観と共に風景美にめぐまれる。また支流の笹間川には発電用のダムが、大代川には防災ダムが建設されている。風化によって破壊しやすい岩質と岩相のために山地には崩壊地が多くかつての地すべりによる崩壊地の地形がみられ、崩落物質が河床に供給する量も多くダムも堆砂による問題が発生している。また切山、東山などは地すべり指定地として防災工事が進められている。

平野部も扇状地性と低湿性の平野に分けられ形成の歴史もことなるが土地利用や生産性に相違がうまれる。また自然の改変もすすみ河川改修や圃場整備、ゴルフ場や宅造工事による丘陵や山地の改変など小規模ではあるが変貌をきたしてきた。

## 2 気 象

本図幅地域は、赤石山地の南側にあたり駿河湾の影響を受けて極めて気候が温和で、平均気温も15℃前後と恵まれた気象条件にある。

海岸に近い図幅南部の地域では、海流の影響を受けて気温の較差は小さいが、標高の高い大井川上流の山間地帯では較差が大きく冬季の寒冷や夏季の昇温が目立つ内陸気候である。

降水量は、平野部では年平均2300mm前後で、季別にみると冬季は月平均80mm前後であるが春から夏、秋にかけては200mm～300mmの雨量となる。

一方、本県3多雨地域のひとつである大井川上流域に近い本川根観測所では年平均3297mmを記録し、県平均の2300mmに比べて4割以上も多い。

第3表 気 象 表（昭和46年～昭和55年、10カ年平均）

月別 区別	観測所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
		最高気温	静岡	18.1	19.4	22.3	23.8	28.5	31.9	34.2	34.5	32.4	28.5	
	本川根	16.8	17.8	22.7	26.7	29.6	31.8	34.9	35.3	32.5	27.9	23.0	17.8	26.4
	牧之原	15.9	16.5	20.3	23.9	26.9	29.6	32.3	32.5	30.3	26.7	22.6	17.2	24.6
最低気温	静岡	-3.3	-3.2	-1.6	3.9	9.2	15.0	18.8	20.3	15.3	8.8	2.9	-2.3	7.0
	本川根	-7.4	-7.2	-5.1	0.1	4.7	11.2	16.0	17.3	11.8	4.9	-1.0	-6.8	3.2
	牧之原	-4.5	-4.5	-3.2	1.8	7.3	13.9	17.5	19.5	14.1	6.7	1.5	-3.3	5.6
平均気温	静岡	6.5	6.4	9.9	14.8	18.4	22.3	25.4	26.6	23.6	18.6	14.2	8.1	15.9
	本川根	4.0	4.7	7.7	13.4	17.3	21.3	24.5	25.3	22.0	16.7	11.8	5.5	14.5
	牧之原	5.2	5.6	8.3	14.2	17.4	21.1	24.4	25.4	22.5	16.7	12.8	6.8	15.1
降水量	静岡	71	1.12	2.02	2.67	2.36	2.49	3.26	2.44	2.81	1.91	1.21	72	2,394
	本川根	82	1.38	2.51	3.65	2.61	3.51	4.77	5.04	4.06	2.60	1.38	95	3,297
	牧之原	75	1.03	2.13	2.50	2.50	2.53	2.67	2.52	2.50	1.99	1.16	71	2,299

資料：気象月報

### 3 就業構造

この地域の昭和55年10月現在における産業別就業人口の比率は、第1次産業17.5%第2次産業40.0%第3次産業42.5%である。

これを昭和50年と比べると、第1次産業が4.0%減少し、第2次産業が1.9%第3次産業が2.1%それぞれ増加して、本地域の産業が製造業、商業を中心に伸びていることがわかる。

地域的にみると北部の川根町、中川根町、春野町、岡部町では、立地条件の特

第4表 産業分類別

分類 市町村	総数	第一次産業				第二	
		農業	林業	水産業	計	鉱業	建設業
県全体	1,743,584	165,843	4,849	13,707	184,399	1,733	147,426
島田市	37,462	4,692	82	20	4,794	69	3,342
藤枝市	51,023	6,067	46	69	6,182	9	4,346
掛川市	34,611	6,563	37	11	6,611	8	2,978
金谷町	11,640	2,365	43	8	2,416	111	901
川根町	4,262	1,109	163	7	1,279	44	586
森町	11,489	2,290	155	4	2,449	1	1,123
岡部町	6,226	2,070	41	6	2,117	1	421
中川根町	4,142	1,234	140	2	1,376	13	691
春野町	4,560	1,064	557	—	1,620	10	507
地域計	165,415	27,453	1,264	127	28,844	266	14,895

資料：国勢調査（昭和55年10月1日現在）

静岡市については図幅内に占める面積が少ないため省略する。

### 4 交通

交通網の整備は地域の繁栄と住民の日常生活を豊かにするうえで重要なことである。図幅内の主要な交通網は第2図のとおりで道路網は、図幅南部を東西に走る国道1号線並びに同バイパスによって東は静岡市、西は浜松市方面に通じている。主要地方道は大井川、瀬戸川、原野谷川に沿って南北に走り島田市、藤枝市、

色を生かした茶、シイタケを主産物とする農業が盛んで、第1次産業の比率は30%台を示し県平均10.6%を大幅に上廻っている。

一方、地域南部の島田市、藤枝市では第1次産業の占める比率は12%台で、県平均は上廻っているものの地域としてみるとその割合は低く、化学工業、木材工業および食料品製造販売等を基幹産業とする第2次、第3次産業の比率が高くなっている。

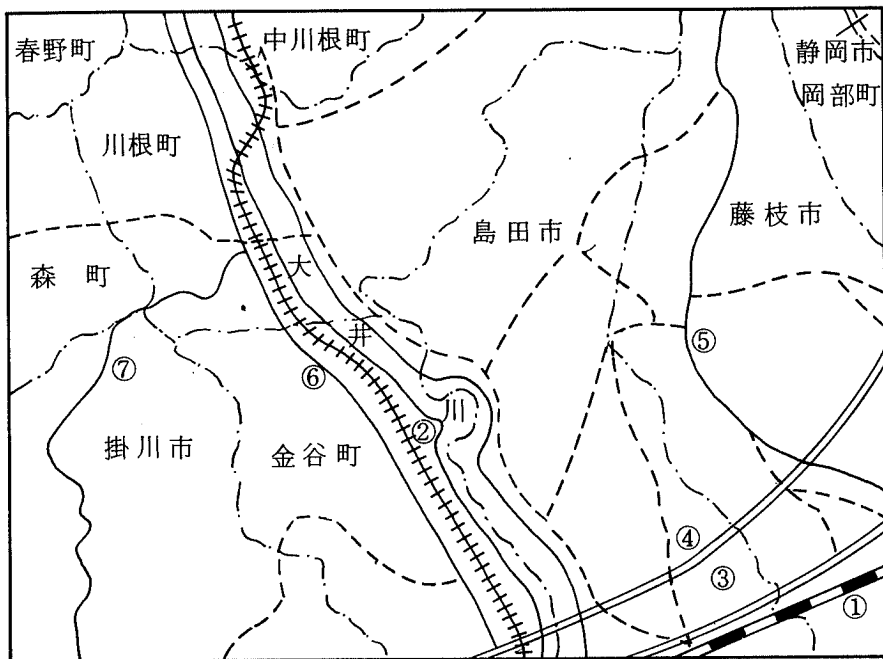
### 就業者数

次産業		第三次産業				分類	構成比		
製造業	計	小売業 卸売業	サービス業	その他	計	不能	第一次 産業	第二次 産業	第三次 産業
539,860	689,019	364,781	299,756	205,109	869,646	520	10.6	39.5	49.9
13,052	16,463	7,109	5,213	3,861	16,183	22	12.8	43.9	43.2
15,286	19,641	11,058	7,511	6,619	25,188	12	12.1	38.5	49.4
11,006	13,992	5,613	4,949	3,420	13,982	26	19.1	40.4	40.4
3,366	4,378	2,035	1,446	1,364	4,845	1	20.8	37.6	41.6
1,092	1,722	514	435	312	1,261	0	30.0	40.4	29.6
3,938	5,062	1,597	1,478	898	3,973	5	21.3	44.1	34.6
1,433	1,855	1,010	718	524	2,252	2	34.0	29.8	36.2
749	1,453	520	479	312	1,311	2	33.2	35.1	31.7
1,076	1,593	433	597	317	1,347	—	35.5	34.9	29.6
50,998	66,159	29,889	22,826	17,627	70,342	70	17.5	40.0	42.5

掛川市と北部の各町を結んでいる。

一方鉄道は、国鉄東海道本線と国鉄金谷駅を起点とする私鉄大井川鉄道の2路線がある、大井川の清流に沿って本川根町まで結ばれている大井川鉄道は全国唯一のSL営業運転路線で、家族づれやSLファンに喜ばれている。

## 第2図 交通網図



- 注) ① 国鉄東海道本線      ④ 国道1号線バイパス  
 ② 私鉄、大井川鉄道      ⑤ 主要地方道、藤枝黒俣線  
 ③ 国道1号線              ⑥        "      金谷、中川根線  
                                  ⑦        "      掛川、川根線
- その他 ----- 一般県道

## Ⅳ 主要産業の概要

### 1 農 林 業

本地域の専業、兼業別農家戸数並びに経営耕地面積は第5表のとおりである。

昭和50年の農業就業人口は31603人で、この5年間に4150人(13%)減少したが農家数については988戸(4.7%)の減少にとどまっている、専業農家は2325戸で昭和50年に比べて218戸(8.6%)減少し県平均4.4%の減少率を上廻っている。

また、第2種兼業農家は年々増加して全農家数の58%を占めるに致った、これは農業人口が他産業へ流出していることに加えて鈍化傾向ながら兼業化が進んでいることを示している。

一方、経営耕地面積は北部山間地の川根町、中川根町、春野町では極めて狭く、1戸当り0.35ha～0.47haである、地域南部の藤枝市、掛川市、金谷町では0.66ha～0.72haと県平均の0.6haを上廻っている。

農業生産については、各市町村とも茶が生産額の主体をなし地域全体でもその割合は33.8%を占めている。中でも良質茶の産地として名声を高めている川根町では64.6%に達している。

また、水田地帯における施設園芸も盛んで藤枝市、島田市ではトマト、キュウリ、イチゴ、レタス、掛川市ではバラ、メロン、森町ではレタス等が米と共に基幹作物として産地をなしている。

この他、本地域は椎茸の生産地として古くから知られており県内生産量の25%(乾椎茸)を生産しているが、スギ、ヒノキ等の人工林が多くなったことから原木に不足を生じているのが現状である。

一方北部山間地の春野町、中川根町、川根町では町面積の85%以上を林野が占め茶と共に主要産業として良質木材を生産しており、林業構造改善事業等を施行してその振興を図っている。

第5表 専業、

区 分	総 農 家 数			専 業 農 家			第1種
	昭50年	昭55年	対50年比	昭50年	昭55年	対50年比	昭50年
静岡県	140,127	132,037	94.2	17,436	16,665	95.6	36,069
島田市	3,445	3,260	94.6	407	392	96.3	1,031
藤枝市	4,489	4,310	96.0	623	530	85.1	1,562
掛川市	4,959	4,729	95.3	493	493	100.0	1,721
金谷町	1,521	1,494	98.2	264	232	87.9	561
川根町	899	884	98.3	97	111	114.4	376
森町	2,042	1,870	91.6	193	173	89.6	668
岡部町	1,165	1,105	94.8	279	182	65.2	574
中川根町	1,207	1,176	97.4	122	104	85.2	405
春野町	1,325	1,236	93.3	65	108	166.2	370
地域計	21,052	20,064	95.3	2,543	2,325	91.4	7,268
構成比	100.0	100.0		12.1	11.6		34.5

資料：農林業センサス（昭和55年2月1日現在）

第6表 農用地面積

区 分	県 全 体		島 田 市		藤 枝 市		掛 川 市		金 谷 町	
	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
1農用地面積	110,372	14	2,348	18	3,944	28	4,134	22	1,066	16
田	42,649	5	1,012	8	1,735	12	2,286	12	417	6
畑	67,723	9	1,336	10	2,209	16	1,848	10	649	10
2森林面積	502,905	65	7,026	54	5,936	42	9,637	52	3,639	55
民有林	409,200	53	7,024	54	5,936	42	9,300	50	2,747	42
国公有林	93,705	12	2	0	—	0	337	2	892	13
3宅地その他	163,983	21	3,701	28	4,318	30	4,834	26	1,910	29
行政面積	777,263	100	13,075	100	14,198	100	18,605	100	6,615	100

資料：1. 行政面積は、建設省国土地理院「全国道府県市町村別面積調」に  
 2. 農用地及び宅地、その他面積は、県市町村課「固定資産に関する概  
 3. 森林面積は、県林政課「静岡県林業統計要覧」による。（昭和55年



兼業別農家数

兼業農家		第2種兼業農家			経営耕地面積				
55年	対50年比	50年	55年	対50年比	田	普通畑	果樹園	茶園	1戸当り
30,154	83.6	86,622	85,218	98.4	0.34	0.13	0.41	0.30	0.60
871	84.5	2,007	1,997	99.5	0.31	0.03	0.22	0.36	0.59
1,327	85.0	2,304	2,453	106.5	0.37	0.03	0.36	0.25	0.72
1,291	75.0	2,745	2,945	107.3	0.39	0.04	0.12	0.31	0.66
526	93.8	696	736	105.7	0.25	0.03	0.12	0.50	0.70
282	75.0	426	491	115.3	0.17	0.03	0	0.41	0.47
532	79.6	1,181	1,165	98.6	0.51	0.03	0.09	0.23	0.63
517	90.1	312	406	130.1	0.22	0.03	0.47	0.26	0.91
352	86.9	680	720	105.9	0.15	0.03	0.08	0.40	0.38
268	72.4	890	860	96.6	0.17	0.05	0.08	0.25	0.35
5,966	82.1	11,241	11,773	104.7	0.35	0.04	0.31	0.34	0.66
29.7		53.4	58.7						

及び森林面積の概要

川根町		森町		岡部町		中川根町		春野町		地域計	
(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
442	4	1,444	11	1,202	23	458	4	721	3	15,759	13
52	1	860	6	178	4	40	1	135	1	6,715	6
390	3	584	5	1,024	19	418	3	586	2	9,044	7
10,618	90	9,695	72	3,317	62	10,418	85	23,270	92	83,556	69
10,618	90	9,395	70	3,317	62	9,410	77	17,408	69	75,155	62
—	0	300	2	—	0	1,008	8	5,862	23	8,401	7
672	6	2,293	17	823	15	1,337	11	1,288	5	21,176	18
11,732	100	13,432	100	5,342	100	12,213	100	25,279	100	120,491	100

よる。(昭和54年10月1日現在)

要調査」による。(昭和56年1月1日現在)

1月31日現在)

第7表 主 要

区 分	県 全 体		島 田 市		藤 枝 市		掛 川 市		金 谷 町		
		構成 比		構成 比		構成 比		構成 比		構成 比	
農業生産額	299,338	100	7,177	100	8,245	100	10,795	100	3,087	100	
耕 種	全 体	195,697	65.4	5,072	70.6	6,512	79.0	7,231	67.0	2,441	79.1
	米	35,243	11.8	924	12.9	1,648	20.0	2,110	19.6	305	9.9
	野 菜	62,360	20.8	821	11.4	908	11.0	1,106	10.2	64	2.1
	果 実	20,411	6.8	137	1.9	805	9.8	109	1.0	74	2.4
	工 芸 農 作 物	48,430	16.2	2,736	38.1	2,456	29.8	3,125	29.0	1,761	57.0
	その他	29,253	9.8	454	6.3	695	8.4	781	7.2	237	7.7
畜 産	全 体	84,472	28.2	1,075	15.0	816	9.9	2,238	20.7	90	2.9
	乳用牛	16,050	5.4	153	2.1	198	2.4	717	6.6	—	0.0
	肉用牛	8,088	2.7	252	3.5	117	1.4	287	2.7	22	0.7
	豚	29,698	9.9	370	5.2	310	3.8	896	8.3	47	1.5
	鶏	29,675	9.9	277	3.9	162	2.0	335	3.1	17	0.6
	その他	961	0.3	23	0.3	29	0.3	3	0.0	4	0.1
養 蚕 加 工 農 産 物	19,169	6.4	1,030	14.4	917	11.1	1,326	12.3	556	18.0	
椎 茸	乾(t)	675.9		21.6		18.2		5.1		2.1	
生産量	生(t)	2,222.3		64.0		48.0		9.0		7.0	

資料：静岡県農林水産統計年報による（計算期間、昭和54年1月1日から

注）：椎茸生産量については静岡県林業統計要覧による。（昭和55年1月

## 2 商 業

本地域の商業は昭和54年の商業統計調査によれば商店数6822店、従業者数23893人、年間販売額3720億8000万円となっている。

これを昭和51年と比較すると商店数で1.1倍、商品販売額で1.5倍の伸びを示しているものの小規模店が多く商店数では、小売業が全体の70%を占めており、

農 業 粗 生 産 額

川 根 町		森 町		岡 部 町		中川根町		春 野 町		地 域 計	
	構成 比		構成 比		構成 比		構成 比		構成 比		構成 比
1,117	100	4,514	100	2,610	100	1,216	100	1,924	100	40,685	100
878	78.6	3,359	74.4	1,948	74.6	871	71.6	796	41.4	29,108	71.5
30	2.7	879	19.4	191	7.3	15	1.2	75	3.9	6,177	15.2
28	2.5	1,366	30.3	241	9.2	26	2.1	75	3.9	4,635	11.4
6	0.5	67	1.5	515	19.7	7	0.6	19	1.0	1,739	4.3
722	64.6	861	19.1	848	32.5	721	59.3	545	28.3	13,775	33.8
92	8.3	186	4.1	153	5.9	102	8.4	82	4.3	2,782	6.8
25	2.2	729	16.1	423	16.2	158	13.0	914	47.5	6,468	15.9
—	0.0	83	1.8	26	1.0	—	—	—	—	1,177	2.9
8	0.7	160	3.5	—	0.0	—	—	51	2.6	897	2.2
15	1.3	300	6.6	54	2.1	83	6.8	363	18.9	2,438	6.0
2	0.2	185	4.1	336	12.9	74	6.1	500	26.0	1,888	4.6
0	0.0	1	0.1	7	0.2	1	0.1	—	—	68	0.2
214	19.2	426	9.5	239	9.2	187	15.4	214	11.1	5,109	12.6
30.4		19.3		5.9		17.6		47.6		167.8	
8.7		21.5		61.2		1.8		34.0		255.2	

同年12月31日までの1年間)

31日現在、生産額が明確でないため、参考として生産量のみ記載)

中でも食料品小売業の比率は高く30%に達している。

一方、住民の買物動向を見ると日用品、あるいは食料品など日常生活必需品については比較的地元の商店を利用しているが、高級品や専門品については品物の豊富性等の理由により静岡市や浜松市への購買流出が著しい。

また、島田市、藤枝市、掛川市では都市化と歩調を合わせて商店街も整備されてきており、大型店の進出もあって停滞気味であった商業会も刺激を受け、商業

戦線も今後一層激化するものと思われる。

第8表 商

市町村	商店数		売場面積		従業員数	
	51年	54年	51年	54年	51年	54年
島田市	1,440	1,555	45,650	57,446	5,110	5,688
藤枝市	2,020	2,274	77,519	85,014	7,759	8,725
掛川市	1,244	1,353	54,095	62,445	4,468	4,939
金谷町	453	443	13,439	14,762	1,428	1,459
川根町	182	193	4,995	6,188	435	491
森町	464	487	13,310	14,739	1,204	1,266
岡部町	179	168	5,641	5,017	487	541
中川根町	176	178	5,279	6,095	405	398
春野町	179	171	6,321	5,334	402	386
地域計	6,337	6,822	226,249	257,040	21,698	23,893
県全体	80,608	85,572	2,659,145	2,869,636	304,032	320,884

資料：静岡県商業統計調査（昭和54年6月1日現在）

### 3 工業

本地域の昭和55年12月31日現在における1年間の製造品出荷額は8317億7300万円を記録、昭和50年より3931億4400万円（90%）の増加となった、中でも化学工業、食料品、電気機械等の伸びが著しい。

事業所数は2548事業所で昭和50年より23事業所増加した、これは食料品、木材、木製品製造業が減少したものの家具装備品、電気機械、一般機械製造業等が増加したためである、事業所の所在地別の内訳をみると、藤枝市の761事業所（地域全体の29.8%、県全体の2.5%）が最も多く、ついで島田市730事業所、掛川市420事業所等となっている。

従業者数は41661人で昭和50年より1570人（3.9%）の増加となった、業種別にみると食料品が4995人（12%）で最も多く、ついでその他工業4324人、家具装備品4246人、木材木製品3680人等となっている。

一方、1年間の製造品出荷額は8317億7300万円で昭和50年の1.9倍の伸びを

業 の 概 要

年間販売額		1 商店 当り		従業員 1 人 当り
5 1 年	5 4 年	従 業 者	年間販売額	年間販売額
百万円 51,395	百万円 71,313	3.7	百万円 46	1,254 万円
123,525	181,294	3.8	80	2,078
48,405	77,594	3.7	57	1,571
12,892	15,981	3.3	36	1,095
2,993	4,185	2.5	22	823
7,863	10,191	2.6	21	805
4,630	6,136	3.2	37	1,134
2,187	2,764	2.2	16	694
2,580	2,622	2.3	15	679
256,470	372,080	3.5	55	1,557
5,489,791	7,145,460	3.7	84	2,227

示した、業種別には食料品が最も多く1804億5000万円（21.7%）、ついで化学工業、電気機械、家具装備品の順となっている。

次に出荷額の大きな市町村における主要業種の特色をみると、島田市は木材工業、パルプ、紙加工品を基幹業種として発展しており自動車計器類についても全国の70%を生産している、藤枝市は昭和35年以降に誘致した大手企業による化学製品の生産が順調で産地を形成している、また、木工業がこぞって進出した協業団地も軌道に乗り近代化の道を進んでいる。

一方、工場立地条件も備わり数多くの大手企業が進出している掛川市では、世界の生産量を誇る堅型ピアノをはじめ、電気、機械、化粧品等が出荷額の大きなウエイトを占めている、また金谷町では特産物である茶との結びつきが強く、製茶機械の製造では全国一の市場占有率を誇っている。

本地域における工業のあらまは以上であるが、今日の工業をとりまく環境は厳しく地価の高騰や地下水の低下、さらに悪臭、水質汚濁、騒音等の公害問題を

ど大きな課題が山積している、このため土地利用計画に基づいた企業の団地化など、環境と調和した工業立地をはかると共に資本力の弱い中小企業の体質改善を

第9表 事業

区分 市町村	事業所数		従業者規模別			
	50年	55年	1～29人		30人以上	
			50年	55年	50年	55年
島田市	ヶ所 694	ヶ所 730	ヶ所 635	ヶ所 683	ヶ所 59	ヶ所 47
藤枝市	713	761	639	689	74	72
掛川市	329	420	285	379	44	41
金谷町	185	171	168	152	17	19
川根町	168	40	163	34	5	6
森町	209	208	191	188	18	20
岡部町	102	96	95	88	7	8
中川根町	56	54	51	50	5	4
春野町	69	68	63	62	6	6
地域計	2,525	2,548	2,290	2,325	235	223
県全体	29,542	30,426	27,363	28,155	2,179	2,271

資料：静岡県工業統計調査（12月31日現在）

進めて行く必要がある。

所 の 概 要

従業者数		製造品出荷額		備 考
50年	55年	50年	55年	
12,582 <sup>人</sup>	11,273 <sup>人</sup>	153,066 <sup>百万円</sup>	249,033 <sup>百万円</sup>	
11,990	12,377	142,879	281,306	
7,415	8,590	72,494	156,311	
2,525	2,748	34,374	60,084	
665	575	4,294	6,522	
2,477	3,317	16,992	45,904	
1,110	1,456	8,883	22,131	
526	445	2,722	4,603	
801	880	2,925	5,879	
40,091	41,661	438,629	831,773	
472,097	484,351	524,718,736	953,117,457	

第10表 産業別、事業所数、

区 分	島 田 市		藤 枝 市		掛 川 市		金 谷 町		川 根 町	
	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
食 料 品	116	83,574	159	47,030	121	17,330	57	10,607	20	3,149
木材、木製品	154	14,765	70	7,686	48	6,316	26	8,042	6	470
家具、装備品	114	14,522	160	14,313	27	2,382	6	191	—	—
化学工業	3	8,382	7	103,431	2	x	1	x	—	—
金属製品	36	3,706	65	5,480	21	3,196	6	543	—	—
一般機械	109	11,057	58	16,356	27	11,554	26	4,269	3	448
電気機械	23	5,668	51	20,759	17	19,766	6	186	2	x
輸送機械	26	4,759	31	11,629	29	13,167	3	221	1	x
そ の 他	149	102,600	160	54,622	128	82,600	40	36,025	8	2,455
計	730	249,033	761	281,306	420	156,311	171	60,084	40	6,522
構成比	28.6	29.9	29.9	33.8	16.5	18.8	6.7	7.2	1.6	0.8

資料：静岡県工業統計調査（昭和55年12月31日現在）

注）：xは秘匿のため他に集計金額が記入してある、従って産業別の合計金額は実数で



製造品出荷額の概要

(単位 百万円)

森 町		岡 部 町		中川根町		春 野 町		地 域 計		構 成 比	
事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
44	12,740	15	5,100	35	743	8	132	575	180,405	22.6	21.7
38	4,072	17	559	11	614	20	1,622	390	44,146	15.3	5.3
22	1,843	38	12,018	—	—	1	x	368	45,269	14.4	5.5
1	x	—	—	—	—	—	—	14	111,813	0.6	13.4
12	1,922	6	1,695	—	—	4	222	150	16,764	5.9	2.0
8	909	4	312	—	—	—	—	235	44,905	9.2	5.4
4	651	2	x	1	2,329	2	x	108	49,359	4.2	5.9
9	5,384	—	—	—	—	4	1,251	103	36,411	4.0	4.4
70	18,383	14	2,447	7	917	29	2,652	605	302,701	23.8	36.4
208	45,904	96	22,131	54	4,603	68	5,879	2,548	831,773	100	100
8.2	5.5	3.8	2.7	2.1	0.6	2.6	0.7	100	100		

ない。

各

論

# I 地形分類

## 1 地形の概要

家山図彙にふくまれる地域は、図のほぼ中央を南流する大井川の河谷低地を以て、東部山地、西部山地、および南部に分布する大井川下流低地の扇状地平野に大別できる。面積的には山地のしめる割合が高く、平坦地のすくない図幅であるが、山地もいわゆる中山性、低山性の山地で東南部には丘陵地、西南部には丘陵、台地などがみられる。

20万分の1地形分類図による地形区分をあてはめてみると、志太春野山地の小起伏・中起伏の山地がほとんどで、大起伏山地が突出部を中心に分布する。水系は南流する大井川水系を中心に、東部は瀬戸川水系、西部には太田川水系の地域がふくまれているが、その方向性に特性がみられる。それを山系の配列とともに概観すると、北東—南西方向、北西—南東方向の傾向が斜交しながら水系、山系を方向づけているといえる。またその方向性はこの図幅にふくまれる地域の地質構造との関係が深い。

家山図幅にふくまれる地域の地質はほぼ四万十層群からなり、東南部にはそれよりあたらしい第三系の瀬戸川層群及び大井川層群が分布している。そしてそれらの背斜軸、向斜軸の走向、地層のはしり方は北東—南西方向が卓越しており主要な水系も山系はそれに規制されていることになる。また水系は地層の境界である断層に大きな影響をうけるが、おもな支流の方向はほぼそれと関係をもつといえる。

地かく変動のはげしかった赤石山地の影響をうけ、その前山である図幅内の山地もその変化をうけている。それは断層や褶曲といった構造的なものとともに、河川の蛇行(曲流)、峡谷部の分布、段丘地形の発達などにあらわれている。またそれは侵食のはげしさの結果でもあり、土地の隆起に対する下刻という効果として表現された結果である。また低山や丘陵や台地の周辺の地すべり性の地形も地域の特色でもある。また河川の旧流路を示す地形、山頂平坦面の分布、崩壊性の地形などはいずれも、この地域の地形的特色でもある。

大井川の侵食作用とともに堆積作用のはげしさは、洪水の歴史とともに下流の平野を形成してきたが、扇状地面には旧流路も残っており、その形成のあたらしさも特性のひとつである。

## 2 地形区

本図葉の地形区については、海拔高度、起伏量、谷密度、傾斜分布、地形面の性質、構成物質の特色、地域的なまとまりなどを基準にして地形区を設定することができる。

<地形区分>

I 山地	Ia 安倍川山地	Ia1 朝比奈山地		
	Ib 大井川東岸山地	Ia2 葉梨山地		
		Ib1 笹間山地		
		Ib2 高根山地		
		Ib3 伊久美山地		
		Ib4 高尾山地		
		Ib5 千葉山地		
	Ic 大井川西岸山地	Ib6 藤枝山地		
Ic1 家山山地				
I 山地	Id 気田川流域山地	Ic2 八高山山地		
		Ie 太田川流域山地		
			If 原野谷川流域山地	
				Ig 日坂（掛川）山地
II 牧の原台地周辺丘陵				
III 牧の原台地				
IV 低地	Na 大井川低地	IV 1 大井川谷底低台地		
		IV 2 大井川下流平野（大井川扇状地）		
		IV 3 大代川谷底低地		
		IV 4 大津谷川谷底低地		
		IV 5 瀬戸川谷底低地		
		IV 6 葉梨川谷底低地		
	Nb 原野谷川低地			

### 3 地形分類

#### 安倍川山地 ( I a )

安倍川山地は、静岡図幅からの延長にあたる朝比奈川流域の朝比奈山地( I a 1 ) 葉梨川流域の葉梨山地 ( I a 2 ) に区分される。地層は北部は第三系の瀬戸川層群の砂岩・頁岩からなり、南部には大井川層群の砂岩、泥岩からなる地域もふくまれ、侵食による抵抗の差異もみられる。流路ぞいの谷底低地をのぞくと中起伏山地がひろがり、高度もほぼ 500 m 以下であるが下刻もすすみ、小支谷が樹枝状に発達するとともに峡谷状の地形のみられる区間もある。山頂や山腹に緩斜面が残ることもおおくみかん園や茶園となり稜線部までも開かれていたり、斜面の一部が森林にかこまれた茶園になっていたりする風景も特色である。朝比奈川支流の青羽根川上流の青羽根は地すべり性の崩壊地形がみられ、地すべりは継続しているし、鉾山のあとがあって輝銅鉾の採掘がおこなわれていた。集落も緩斜面上に立地している。花倉西方付近は丘陵性の地形をもち、開析のすすんだ斜面は茶園となっている。また山地と低地との境界は一般に明瞭であるが、支谷の出口や斜面下には崖錐性の堆積地もあり集落の立地を与えている。瀬戸川水系との境界は南北にのびる尾根であるが、峠や鞍部をこえるルートもあり、谷頭部はスプーン状の谷壁をもち、かつての崩壊によって形成された斜面形をもつ場合もおおい。なお青羽根付近は瀬戸川層群と四万十層群との境界にあたる笹山構造線がとおり、貫入岩体の輝緑岩もみられ、破碎帯性の地すべりに由来する現象も生起している。

#### 大井川東岸山地 ( I b )

大井川流路の東側の山地を一括して大井川東岸山地とし、流路の流域をまとめて笹間山地 ( I b 1 )、高根山地 ( I b 2 )、伊久美山地 ( I b 3 )、高尾山地 ( I b 4 )、千葉山地 ( I b 5 )、藤枝山地 ( I b 6 ) の 6 山地に区分した。地層は南部の大井川層群である砂岩、泥岩の地域をのぞいて、瀬戸川層群及び四万十層群の分布する地域である。その走向は北東—南西方向であり、山系や水系はそれに従う特性をもっている。

笹間山地 ( I b 1 ) は笹間川にそう山地で、流路は曲流がはげしく、局地的に段丘をもつが下流部は笹間川ダムによる人工湖となりその上端は桑山に達する。桑山は堆砂により河床が上昇し水害を受けやすくなり問題となった。和田山周辺は大起伏山地であるが全体は中起伏山地であり崩壊も発生している。高根山を中心とするブロックを高根山地 ( I b 2 ) とした。東麓の宇嶺の滝付近は下刻がはげし

い峡谷をなして瀬戸川に流れるが、高位置緩斜面の蔵田付近の分水界は複雑で、伊久美川上流の大久保川とは河川の争奪の跡が考えられる。侵食のげしきは高根山頂南部の崩壊群にも結びつき、瀬戸川層群の岩質とも関係している。また大森、西向も崩壊性の緩斜面に立地した集落で、方向性からみると身成川上流の上河内—大森—西向—大平へと構造線が考えられる。また高根山周辺は大起伏山地で傾斜も大きい。谷頭の崩壊からの土砂の流出も著しく、河谷は袋状の堆積地を形成する。伊久美川流域の伊久美山地（I b 3）は中起伏山地であり、稜線にそう平坦面に特色をもち、峠付近は稜線上に集落がみられ、茶園がひろがる。したがって谷頭部の急傾斜地も著しく、傾斜の変換部が各地にみられ、昭和35年の山地災害は激甚であった。伊久美川も曲流がみごとで長島付近はその典型であるが、段丘地形もみられる。犬間は高位置緩斜面で旧流路の残りをあらわし、下流の川口も旧流路による地形で、流路の変遷を示している。高尾山地（I b 4）は瀬戸川とその支流滝の谷川にそう山地で南北方向の稜線をもつ滝の谷川の滝の谷付近は著しい下刻をもち、峡谷が特色となるが、地層の走向を斜交する方向をもつ。上流部には崩壊群がみられ山地災害の素因をもつが、明治43年の水害にあたっては山地災害の集中した地域でもあった。相賀川南部から大津谷川、伊太谷川流域にかけてを千葉山地（I b 5）とした。千葉山を中心とする尾根は北東—南西方向であるが、それ以南は北西、南東方向で卓越してくる。この方向性の境界は四万十層群と瀬戸川層群との境界にあたり、貫入岩体の貫入もみられ、千葉山付近の稜線にそって輝緑岩も分布する。そしてこの変質による地すべりもみられ、後畑、千葉などの集落はそのあとの緩斜面に立地したものである。瀬戸川層群の分布地域は四万十層群の地域とくらべ谷の発達がこまかくそのパターンも異質である。藤枝山地（I b 6）は泥岩、砂岩を主とする大井川層群ともよばれる地層からなり丘陵性の小起伏山地で緩傾斜であるためゴルフ場などへの改変や住宅団地の造成もみられる地域である。小さい谷が交錯して開析をすすめる茶園、樹園地の面積も広く、局的に崩壊や稜線下の地すべり性崩壊もみられる。

### 大井川西岸山地（I c）

大井川の西側にひろがる山地を大井川西岸山地とし、家山川流域の家山山地（I c 1）と八高山を中心とする八高山山地（I c 2）とに区分した。いずれも四万十層群の分布する地域でその方向性は大井川東岸からの延長で北東—南西方向を

もつが家山川はそれと斜交する。家山山地（Ic1）は大起伏・中起伏山地からなり、家山川とその支流は蛇行と峡谷をもちながら山地を刻んでいる。集落は谷底よりむしろ山腹斜面の緩傾斜部に立地し湯島、峰、市尾、切山などはその例である。いずれも地すべり性崩壊によってできた山腹の緩斜面とその堆積部と考えられ、切山は大量の土砂を谷ぞいに流出させ崩壊のあとも明瞭である。倉平もその名が示すように稜線上の緩斜面で周辺の急斜面と対象的である。八高山を中心とする八高山地（Ic2）も稜線ぞいの平坦面の発達に残りはおおいが谷頭侵食もはげしく傾斜の変換にそう崩壊性地形が顕著である。林道が山地内へのびるが、道路ぞいの斜面の破壊も激しい。大代川上流には防災ダムが作られている。南部の神尾山周辺も平坦面が残り、やはり谷頭部の変化がみられる。大井川左岸の神座から粟島一庄司一丹間へのびる谷筋が四万十層と新第三系との境界であり八高山地の南限であるが、等高線の性質が急変し、地質と地形との関係がみごとにあらわれていて、谷密度にその差は表現されてくる。

#### 気田川流域山地（Id）

天竜川水系の気田川流域の地域で図幅の北西端をしめ、夕日峠から春野山にかけての稜線がその分水界となり、周智郡春野町にふくまれる。流域によって区分しただけで、特に特色を指摘することは困難であるが、比較的幅の広い河谷を形成し、流路にそう山麓の緩斜面のしめる面積も広いが、山地は大起伏山地となっている。

#### 太田川上流山地（Ie）

大日山南部と西部の山地で、太田川上流の吉川にそう山地で、流路は四万十層の方向性と一致している。大日山頂一帯や金剛院のあたりは稜線上に平坦地が残るが、河川の下刻もはげしく大起伏と中起伏山地である。

#### 原野谷川流域山地（If）

原野谷川上流、八高山西南部一帯を原野谷山地とした。地層は四万十層群分布地域の南限にあたり、日坂の山地と境する原野谷川が曲流をくりかえしながら北東一南西方向に流路をとっており谷底低地も黒俣、居尻、孕石と山間盆地状にみられ、低地の範囲も広がる。原野谷川ダムは防災ダムとして建設され萩間に達する。大尾山南斜面はかつての大崩壊地であり、明治期以降、治山工事がすすめられたし、当時は裸地もおおく、土砂供給源であった。居尻は山腹緩斜面に位置す

るが、地すべり性崩壊に由来する地形面である。

### 日坂（掛川）山地（I g）

図幅の南西部に位置する山地で新第三系の地層からなる丘陵性の山地である。侵食がすすんで山地をこまかく開析するために谷密度は高く、ひだのおおい山地となる。水系も南北方向となっており、丹間—粟島が境界となる。東山地区は地すべり地域で指定地となっている。倉真温泉もある。

### 牧の原台地周辺丘陵（II）及び牧の原台地（III）

図幅の中央南部一帯の範囲で牧の原台地の平坦地と周辺の開析された部分を丘陵地とし一括した。安田原の標高 250 m ほどが牧の原の平坦な台地面の北限で、南東方向にむけて高度を減じ、傾斜している。大代川と大井川との間には 260～280 m の平坦面も広く発達し、茶園となっている。表層は牧の原礫層からなり、中位段丘面に対比される面の延長であるが、その分布はせまく限られている。砂礫層の基盤は新第三系の掛川層群で、開析がすすんでいるので、丘陵性地形のしめる面積も広く、基盤岩石のあらわれている範囲も広がる。低い台地面は横岡山や、金谷付近の 100～140 m ほどの高度で分布するが中位面と同じく周辺は開析されて丘陵性の地形となり谷底は水田、平坦な頂部や斜面は茶園、急崖部は森林といった土地利用区分もあきらかである。大代川をはさんでその北東部と南西部に残る平坦面が図示されている。台地周辺は地下水の滲出と礫層と基盤岩石との間の不整合による湧水がすべり面を形成して地すべりが発生しやすいが、粟ヶ岳東方の東山地区の地すべりもそれに関する箇所と考えられる。東山地区の大久保、奥貝戸は斜面滑落による複雑な地形を形成する。

### 大井川谷底低台地（IV a 1）

本図葉内の低地は大井川の河谷低地と大井川扇状地をのぞくと、河川にそうせまい幅をもった沖積低地にすぎない。しかし構成物質によって低湿な三角州性平野、低湿地、自然堤防状の微高地、泥質粘土質の低地、砂礫質の河谷底地など、その内容はさまざまである。

図幅の中央を南流する大井川は、①広い河床をもつこと、②曲流のはげしいこと、③段丘が発達すること、④支谷の合流点付近には沖積地のみられること、な

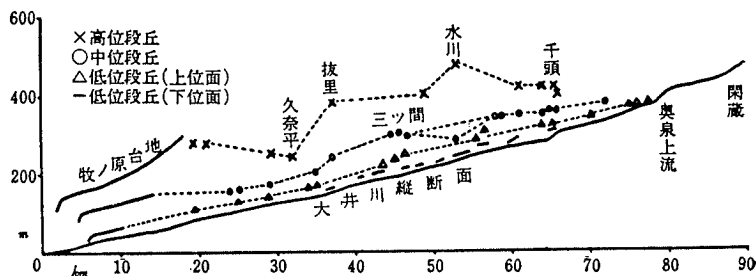


どの特性がみられるが、山地間を埋積するようにあつた砂礫層を埋積させた河床の面積が広い。河谷にそう新しい沖積地、河谷低地に達する崖錐状の堆積地、地形的には台地にふくまれば、河谷にそう段丘平坦面もこの低地にふくませて地域区分をおこなった。扇状地もふくめて河谷低地の砂礫層はあつく、たとえば島田市の上水道の水源として扇状地部の大井川橋のすぐ上流の左岸ぞいの深井戸は、45mでまだ基ばんに達していないし、東海パルプや日清紡の深井戸も基盤に達していない。家山の駿遠橋では河底面から12mほられたが基ばんに達していない。流路は曲流を示し、とくに鷯山七曲りともよばれる久野脇一笹間渡間、久奈平一神座間で曲流がはげしい。段丘地形も断片的ではあるが連続して分布しており、高度から高位段丘群・中位段丘群・低位段丘群に大別でき、低位面はほぼ集落や畑などに利用されている。上位段丘面の中には平坦面が侵食によって消滅して礫層のみとなった場合もある。笹間渡の対岸、久奈平の上位段丘、神尾背後の上位段丘などはその例で30~40mの巨円礫をふくみ、あつさも10mほどをもっている。低位段丘群は高位段丘群にくらべてよく発達しており、その段丘面は重要な農耕地や集落となっている。比高が小さいため河谷低地とした場合もあり、高度はまちまちでその区分は困難である。しかしある場合は礫層にふくまれる礫の大きさをもとにしてその段化を推定されている場合もあり、たとえば40cm内外の巨円礫は大井川扇状地部の現河床にはみられないものであり、高位段丘のひとつの手がかりともされている。下位段丘面が上位段丘との間の崖を囲むように分布していることもあり、久奈平、神座間にみられる。笹間渡北方の大井川左岸にある上位段丘はその分布はせまいが、現在の河床に平行した曲流のあとをしめており、流路のあとをたどる材料となる。大井川の曲流は前輪廻の自由曲流をうけついでるともいわれる。

大井川中流の河岸段丘について、松本繁樹氏の研究を“大井川土地改良区誌”から断片的ではあるが、引用してその特色を理解したい。

“大井川の河岸段丘は、面の連続性や段丘礫層の特徴などを基準にすると、高位段丘、中位段丘、低位段丘の三群にほぼ分類できそうである。高位段丘は一般に小規模で、断片的な分布を示す。段丘礫層の厚さは一般に5m以下と薄い。この

高位段丘面の高度は、久奈平になると240～250mにまで低まり、牧ノ原台地に近い居林付近で310m、城之壇付近では280mと再び高まって、下流の牧ノ原台地に続いていくという。(下図は“大井川土地改良区誌”による)



大井川上・中流の河岸段丘と牧ノ原台地との関係  
—染葉見による—

中位段丘の方は、発達規模が大きく、保存もよい、礫層の厚さも一般に15～20mと、高位段丘礫層に比べてかなり厚いのが特色である。家山付近、鍋島付近、神尾付近などにも断片的にみることができる。これらの中位段丘面を大井川の縦断面図にプロットしてみると、それらはほぼ現在の縦断面に並行しながら続いており、牧ノ原台地内では恐らくその中位段丘群に連続していくものと思われる。下位段丘も中位段丘に劣らず発達がよく、大井川流路沿いの集落の多くは、実はこの下位段丘面上に載っているのである。ところでこの上位面と下位面とに分けることができる。上位面は久野脇、石風呂の各集落面、原八坂の学校の載る面、江戸時代に人工的に切断された牛尾の面、などがそれであるし、いっぽう下位面は、地名、抜里の集落面などがその代表的なものである。”

### 大井川下流平野(大井川扇状地)(Ⅳa2)

大井川扇状地の北部の一部がこの図幅にふくまれてくる。大井川の形成した典型的な扇状地地形で、部分的に粘土層をはさむこともあるが、ほぼ全域にわたってあつい砂礫層からなっている。扇状地面上にはかつての洪水はんらんのとを示す網目状乱流のあとがみとめられるが周辺部では中央にくらべてすくない。大井川右岸、金谷町にも扇状地の頂部がふくまれているが表面の起伏は大きく、旧

流路のあとが残り、土地利用にそのあとが残っていたが、市街地化、工場団地化の進行にともなって平坦化がすすみ、改変されている。なお、扇状地上の大井川右岸に横岡台地が突出して周辺を崖で囲まれる台地となっている。これは大井川の流路を治水の目的で改変させた結果に生じた人工地形の部分もあり、流路の変せんの一例である。すなわち台地の西側を流れていた河川を人工的に開削をして東流させ新田開発と洪水防止の目的にしたものである。

扇状地面の微地形については人為的改変にともなう人工地形もあり、微細な面での観察が要請される。

### 大代川谷底低地（Ⅳa3）

大代川谷底低地（Ⅳa3）は八高山南部に源をもち金谷町市街地南部で大井川に合流する河川の谷底で、図幅では牧ノ原台地と丘陵とを刻む谷として流路をもち低地を形成させている。上流は崩壊地にもなう土砂の搬出がおおいために防災ダムが建設されている。粟島より下流が沖積地を形成するが、河川の改修がすすみ、直線的に人工河川化しており溪口部からは天井川を形成する。流路跡をたどることもできるが、小段丘や崖錐状の堆積地に集落は立地している。宮ノ上、大墓瀬付近では曲流をもち、流路は沖積面をやや下刻するように流れる。旧流路は丘陵の末端を側刻するようにも通っていた。

### 大津谷川谷底地（Ⅳa4）

千葉山南東斜面から南流する大津谷川は落合で尾川を合流し、白岩寺山南方から大井川扇状地にはいり、栃山川と合流し、さらに分流して大井川本流とも合する人工的な流路をもつ河川である。野田以北の山間の堆積低地で低平な泥質堆積物からなる低湿な平野である。それは大井川扇状地に出口を閉塞されたために埋めたてがすすんだともいえる。流路にそっては礫質の堆積物が帯状に分布して、集落をのせているが、水田地帯がひろがり、小支谷が山間にはいりこむ埋めたてタイプを示している。集落は自然堤防状の高まりの上や、山麓の崖錐状緩斜面に立地する。低湿地には泥炭や有機質の堆積物もみられ、扇状地で排出機能を低下せられた山間小支谷の特性をもつ。

### 瀬戸川谷底低地（Ⅳa5）

図幅の東部を南流し藤枝市街地から焼津方面にむかう瀬戸川は、流域の山地がくずれやすい性質をもつ岩石からなるために土砂の搬出量はおおく、明治43年の志太山地の崩壊発生は激しかった。萩間、中山以南に比較的幅の広い沖積地を袋状に断続的に形成させている。原から萩間、宮原、助宗、寺島、堀の内などの集落がそれぞれの低地に発達するが、集落は自然堤防状の高まりや山麓緩斜面上を立地し、低地は平坦な砂礫質堆積物からなり谷稲葉や助宗などの支谷は後背湿地状の様相を呈する。本図幅にはふくまれないが藤枝市街地あたりを溪口にして扇状地性の平野を東部に形成し河川も天井川化している。

### 葉梨川谷底低地（Ⅳa6）

本図幅内には葉梨川谷底低地のうち、花倉、西方の部分がふくまれる。構成物質は軟弱な泥質の堆積物からなる低地であり、丘陵内の谷にそっても埋めたてがすすんでいる。流路にそう自然堤防状の高まりとその後背湿地性の低地とが区別される。

## 4 起伏量図

起伏量は国土地理院発行、縮尺5万分の1地形図の各辺を20等分してえられる各方眼内の、最高点と最低点との標高差を、下記の階級区分によって表示したものである。各階級の分布とひろがりをもとにして、山地、山麓などの地形分類および地形区分図の基準とした。

- 0：50 m未満
- 1：50～100 m
- 2：100～150 m
- 3：150～200 m
- 4：200～300 m
- 5：300～400 m
- 6：400～500 m
- 7：500 m～

3	4	6	5	6	7	4	4	6	6	4	6	5	5	4	5	5	5	4	4
5	6	5	6	6	5	2	5	6	6	4	5	5	3	5	4	5	4	5	4
6	6	6	7	5	5	3	5	5	4	5	4	5	4	6	7	5	4	4	5
5	7	6	4	5	6	4	4	4	6	5	4	4	5	5	5	5	4	5	3
5	6	5	5	6	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	6	4	4	4
4	5	4	4	5	5	5	4	6	5	5	5	4	4	5	5	6	4	5	4
5	4	4	4	4	5	4	3	5	4	5	5	5	4	6	5	6	5	5	2
6	5	4	5	5	2	0	3	4	5	4	4	6	5	4	5	4	4	5	4
5	5	5	5	5	5	4	4	5	4	4	4	5	5	4	3	4	4	3	4
5	4	4	5	4	4	6	4	5	5	3	4	4	4	3	4	3	4	3	4
6	5	4	4	6	5	6	3	5	5	4	5	4	5	4	4	2	4	4	2
5	4	4	5	5	7	5	3	5	5	3	4	4	4	4	4	4	4	3	2
4	5	5	5	5	5	6	3	3	5	5	4	4	4	4	4	4	4	3	1
5	6	5	4	4	4	5	5	4	4	5	4	5	5	4	4	4	3	3	4
5	5	3	4	5	5	4	4	5	4	4	2	4	3	4	4	4	3	3	2
3	3	4	3	4	5	5	5	3	4	4	3	3	3	4	3	3	2	1	1
4	4	4	5	4	4	4	4	4	0	2	4	4	3	2	3	3	2	1	1
5	4	4	4	4	5	5	2	3	0	1	4	3	2	1	2	2	2	1	1
4	4	4	4	4	5	4	3	3	1	0	2	2	2	3	3	1	2	2	1
3	5	3	3	3	5	4	1	2	2	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0

## 5 道路と河川

<国道> 1号線 藤枝バイパス

<主要地方道> 藤枝黒俣線 金谷中川根線 掛山川根線 島田吉田線

河川表（静岡県河川便覧による）

<一級河川>

水系名	支 川 名				河 川 延 長 (m)	流 域 面 積 (Km <sup>2</sup> )		
	第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次		支 川 流 域	自 己 流 域	計
天 竜 川	気田川				50,200	179.86	141.79	321.65
		熊切川			22,150		44.77	44.77
大 井 川					16,240	651.58	628.42	1,280.00
	大 津 谷 川				3,850	13.54	15.81	29.35
		伊 太 谷 川			5,700		9.61	9.61
		尾 川			1,400		3.93	3.93
	大代川				11,740	13.33	18.96	32.29
		董 子 沢 川			1,390		3.10	3.10
	相 賀 谷 川				5,000		13.47	13.47
	伊 久 美 川				13,760	9.85	24.43	34.28
		大 保 久 川			4,500		9.85	9.85
	福用川				1,180		3.40	3.40
	白光川				1,380		7.82	7.82
	身成川				3,700		10.93	10.93
	家山川				5,640	2.43	29.02	31.50
		切山川			1,650		2.48	2.48
		笹間川			15,500		70.77	70.77
菊 川				27,670	123.55	33.30	165.85	

<二級河川>

水系名	支 川 名				河 川 延 長 (m)	流 域 面 積 (Km <sup>2</sup> )			
	第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次		支 川 流 域	自 己 流 域	計	
瀬戸川					26,380	128.70	51.30	180.00	
	朝 比 奈 川				26,500	61.49	30.73	92.22	
		葉梨川			13,100	2.09	29.04	31.13	
			市場川			1,160		2.09	2.09
		青 羽 根 川			1,500		3.15	3.15	
	内瀬戸 谷 川				6,100		7.91	7.91	
	谷 稻 葉 川				3,400		6.03	6.03	
	滝沢川				5,210	6.68	12.66	19.34	
		滝 之 谷 川			3,150		6.68	6.68	
栲山川				13,600	36.11	7.38	43.49		
	東光寺 谷 川			6,150		6.09	6.09		
太田川				43,900	429.85	61.32	491.17		
	原 野 谷 川				37,880	175.92	47.47	223.39	
		逆 川			23,180	77.34	38.58	115.92	
			倉真川			11,360	19.87	19.46	39.33
				掛 川 滝谷川		1,600		7.05	7.05
				掛 川 戸 沢		1,500		3.50	3.50
		西 之 谷 川			5,500		10.58	10.58	

<文 献>

井口正男(1958)大井川中流部における曲流と段丘地形 駒沢地理1号

大井川土地改良区事務所(1976)大井川土地改良区誌

静岡県(1967)大井川流域の防災上の諸問題

静岡県(1974)静岡県の地質

静岡県出版文化会(1978)静岡県の地学

静岡県立金谷高校(1965)大井川流域の河岸段丘の地質研究

島田市(1978)島田市史(上)

(北川光雄)



## Ⅱ 表層地質図

### 総論

本図葉は、大井川中流部山地と瀬戸川流域山地がその大部分を占め、上記河川下流の沖積平野の一部が東南隅に見られるにすぎない。この地域の山地の地質構造はすべて北東—南西方向であり、山地の標高は東南から北西に段階的に高まり、大井川は地質構造に適従した“はめこみ”蛇行を示す。

### 1 未固結堆積物（沖積平野をつくる地層）

沖積平野は図中の南縁と東南隅に大井川、瀬戸川、葉梨川の下流沖積平野の一部が見られるが、河川の規模と運搬量の多少を反映して、大井川の主流の及ぶ範囲には礫層が、主流の影響の及ばない山蔭の部分や、瀬戸川、葉梨川の流域にはしばしば軟弱泥質層から成る低湿地が発達する。この間の地質状態はボーリングによる沖積平野の柱状図によく示されている。

### 2 未固結堆積物（段丘をつくる地層）

瀬戸川、稲葉川流域は最近地質時代の沈降性地域のため、河岸段丘は埋没して、ほとんど見られない。大井川下流から千頭にかけてこの地方の中位段丘である牧ノ原段丘の延長が点在し、また、より下位の低位段丘群が大井川河岸に3～4段にわたって発達する。堆積物はいずれも未固結の河川礫層から成るが、牧ノ原段丘の延長を除いては層厚数 $m$ 以下と薄い。

### 3 固結堆積物（山地をつくる地層）

この図葉の区域は新第三紀の倉真層群、古第三紀の大井川層群と瀬戸川層群、主として白亜紀の四万十層群又は三倉層群の新期から古期にわたる4地層群のつくる山地から成る。倉真層群の山地は本図葉西南隅にその一部が見られるが、下部は砂岩、上部はシルト岩からなり、ゆるやかな褶曲構造をなす。大井川層群の山地はその一部が東南隅に見られるが砂岩がち互層の部分や含礫泥岩又は頁岩の

部分から成る。最近の研究（杉山、1980）によると含礫泥岩は大規模な異地性岩体と考えられている。倉真層群よりも一段と褶曲度は大きい。

瀬戸川層群の山地は大井川層群と十枚山構造線で境され、その西北側に広がる瀬戸川層群の山地全体の西南部が本図葉に含まれる。下部から頁岩がち互層、砂岩がち互層、砂岩、頁岩のリズミカルな互層からなり、複雑に褶曲しながらも全体として北西から南東に向って、上部の地層が露出する。本図中内ではときに石灰岩層をはさむ。

四万十層群（又は三倉層群）の山地は笹山構造線を境にその北西側に広く分布し、本図葉の大部分を占める。下位より有律砂岩頁岩互層、凝灰質頁岩、有律砂岩頁岩互層、黒色頁岩層から成り、複雑に小褶曲しながらも全体として東南側に上部の地層が露出する。瀬戸川層群、四万十層群とも岩石は堅硬であるが、褶曲後の変形作用のため破砕性に富み、これが山崩れ多発の原因となっている。

#### 4 固結岩類（貫入火成岩類）

固結岩類としては、上記の古期地層群のほか瀬戸川層群に貫入したはんれい岩、玄武岩、蛇紋岩の岩体がある。はんれい岩、玄武岩は小岩体であるが、蛇紋岩の岩体は比較的大きく、変質と風化のために局所的な山崩れ、地すべりの原因となり易い。

（土 隆 一）

# Ⅲ 土 壤 図

## 1 岩 石 地

土壤層がなく、基岩が露出している。本図幅では碎石跡地などに分布する。

## 2 岩屑性土壤

(A)C断面をもつ土壤で、(A)層の発達は弱く、かつ、浅い。一般に石礫質のものが多く、固結岩上に乗っているか、あるいは、下部に存在する岩屑堆積物に移行している。これに属する土壤統は牧ノ原2統で、牧ノ原台地北縁に分布し、アカマツ天然林もしくは天然広葉樹林を形成している。土壤名は掛川・御前崎図幅を踏しゆうしたが、前記地域のものより埴質で、ややグライ化の傾向がみられる。

## 3 残積性未熟土壤

多少にかかわらず侵食の影響がみられる(A)・Cまたは(A)・BC・C断面をもつ土壤である。一般に(A)層の発達は弱く、下層に砂礫質のC層がくるものが多い。これに属する土壤統のうち、三ツ野統は、固結堆積岩の残積性風化物を母材とするもので、山地斜面の上部や山頂部に分布し、茶園や普通畑に利用されている。玉取統は、固結堆積岩の再堆積性風化物を母材とするもので、山地斜面に分布し、普通畑、樹園地(主に茶園)として利用されている。この土壤統は、土壤母材の堆積様式からいって残積性未熟土壤とするのには問題があるが、別の土壤統群とするカテゴリーが示されていないから一応この土壤統群に含めて置く。犬間統は、伊久美川ぞいの小段丘や山地斜面を平担にきりひらいた畑地、茶園として利用されている。表層の有機物含量は低い。(未開墾部は赤黄色土) 真砂2統は、固結堆積岩の再堆積性物を母材とするもので、山地斜面の一部に分布するが排水状態が不良で、地表下30cm位のところから湧水し、下層土が過湿であるがグライ層の形成はみられない。現在茶園、普通畑として利用されている。林地土壤の牧ノ原1統は、掛川・御前崎図幅の土壤名を踏しゆうしたが、前記図幅のものよりやや埴質で、黄・赤味が強い。この土壤は、牧ノ原2統に隣接し、牧ノ原台地侵蝕面にあって、主としてアカマツ天然林として利用されているが、生産力は低い。

#### 4 人工未熟土壤

これは本地域の場合、人工（機械開墾）によって自然状態の土層断面形が攪乱され、著しく変形されて未熟な土壤の形態となっているものである。これに属する土壤統は落合統で、固結堆積岩風化物を母材とし、島田市に属する山麓部の茶園造成地に分布し、茶園として利用されている。

#### 5 厚層黒ボク土壤

これは土色の明度、彩度とも2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土層（黒ボクのA層）が50 cm以上の厚さをもつ土壤である。これに属する土壤統は久野脇統である。主に大井川の本流に突き出した形で各所に形成されている河岸段丘上の各所に分布し、茶園として利用されている。

#### 6 黒ボク土壤

これは土色の明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒～黒褐色を呈する腐植に富む表土層（黒ボクのA層）の厚さが25 cm以上50 cm未満のもので、その下位には褐色のB層が存在する。これに属する土壤統のうち、影島統は、大井川の本流に沿って形成された河岸段丘の一部に分布し、茶園に利用されている。家山原統は、黒褐色の腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが20 cm以下で、褐色のB<sub>2</sub>層との間に暗褐色の漸移層（B<sub>1</sub>層）を有するものである。黒褐色腐植質表土層の厚さはやや薄い、黒ボク土としての断面特徴をもつから黒ボク土壤に加えることにした。川根町家山の河岸段丘上に分布し、茶園に利用されている。

林地土壤では、粟ヶ岳統および地名2統である。そのうち、粟ヶ岳統は粟ヶ岳周辺および、それと類似する緩凸な尾根すじに分布している。黒色土層内に認められる石礫は、基岩の堆積固結岩風化物を主体とするが、時には火成岩風化物を含むことがある。地名2統は大井川の河岸段丘面に分布し、やや淡い黒色のA層と小角礫まじりのB層を有する土壤である。これらの土壤は、主としてヒノキ人工林として利用されているが、一部には天然広葉樹林もしくはアカマツ人工林として利用されている。

#### 7 乾性褐色森林土壤

湿潤温帯の森林植生下に発達するA・B・C層位配列を有する土壤である。こ

の土壌は、森林植物の落葉・落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が地表面にやゝ厚く堆積し、その下に黒褐色のA層と褐色もしくは淡褐色のB層があり、両者の推移がやゝ判然としている土壌である。A層下部又はB層上部には乾燥破碎によって形成された独特な土壌構造の発達が見られる。これに属する土壌統は、観音下1統、飯間1統および三倉1統である。このうち、観音下1統および飯間1統は静岡・住吉図幅の土壌名を踏しゆう。観音下1統は葉梨川左岸古第三紀山地の尾根すじに分布し、にぶい黄褐色を呈するB層と土層内に風化の進んだ小礫をやゝ多く含む土壌で、主として天然広葉樹林を形成している。飯間1統は古第三紀山地内であって、観音下1統の西側に帯状に分布し、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。この土壌はB層の色相が観音下1統より幾分褐色味が強いのが特徴である。三倉1統は中世代山地にみられ、その分布域は極めて広く、暗褐色のA層と褐色のB層を具えた土壌で、主としてヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。

## 8 乾性褐色森林土壌（黄褐系）

乾性褐色森林土壌の分布地帯で、暗褐色を呈し、やゝ発達したA層とやゝ堅密で10 YRの明度、彩度の高い色相を帯びたB層を有する土壌である。これに属する土壌統は、居林1統および谷稲葉1統である。居林1統は主として中世代山地、谷稲葉1統は古第三紀山地もしくは丘陵にみられるが、B層の色相は明度、彩度とも後者が幾分高い。両者とも主としてアカマツ天然林を形成する場合が多い。

## 9 乾性褐色森林土壌（赤褐系）

乾性褐色森林土壌のうち、赤色風化殻を母材とする比較的海抜高の低い山地尾根すじに分布し、A層は褐色ないしは暗褐色を呈し、一般に粗しようであるが、あまり発達しない。B層は5ないし7.5 YRの色相をもつ。これに属する横岡4統は、暗褐色ないしは褐色で円礫を含むA層およびB層と、C層下部に堆積岩を母材とする明赤褐色の赤色風化殻をもつ土壌である。この土壌の分布域は極めてせまく、居林1統および2統に接し、主としてクロマツ人工林として利用されている。

## 10 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様の森林帯にあるが、常に地中水分に富む斜面およびその下部に多く現われ、黒褐色ないしは暗褐色を呈するボウ軟な厚いA層が発達し、その下部にある褐色のB層に漸変している。これに属する土壌統は観音下2統、飯間2統、三倉2統および前山統である。このうち観音下2統および飯間2統は静岡・住吉図幅の土壌名を踏しゆう。両土壌とも、それぞれ観音下1統、飯間1統に接し、その下側斜面および沢すじにあって、主としてヒノキもしくはスギ・ヒノキ混植林として利用されている。いずれも、ボウ軟なA層とやや堅密なB層を有するが、B層の色相は前記乾性褐色森林土壌同様明度、彩度とも飯間2統が高い。三倉2統は三倉1統に接し、最も広い分布域をもつ。団粒化の発達したA層・B層を具えているので、生産力は高く、主としてスギ人工林として利用されている。前山統は川根町前山および藤枝市高根山北部の緩凸な尾根すじに分布し、ボウ軟なA層と埴質かつ、堅密なB層を有する土壌で主としてヒノキ人工林として利用されている。

## 11 褐色森林土壌（黄褐色系）

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）の分布する森林帯の斜面下部にみられる。A層は暗褐色、B層又はC層はやや埴質で、7.5YRもしくは、10YRの色相を有し、明度、彩度とも高い。これに属する土壌統は居林2統および谷稻葉2統で、それぞれ1統の下面に接し、ヒノキもしくはスギ人工林として利用されている。両土壌とも、B層およびC層は埴質であるが、粘土風化が著しく、かつ、土壌水が集り易いところでは斑紋もみられる。

## 12 湿性褐色森林土壌

上記の両褐色森林土壌と同じ森林帯に属するが、常に水の集り易い斜面下部や谷底の緩斜面にあらわれ、黒褐色のA層と暗褐色ないしは灰褐色のB層が発達し、両者の推移は漸変している。これに属する土壌統は青羽根1統および三倉3統である。青羽根1統は飯間2統に接し、その下部の緩凹斜面にみられ、スギもしくはスギ・ヒノキ混植林として利用されている。三倉3統は三倉2統に接し、その下側緩凹斜面にあって、灰黄褐色のB層もしくはC層には多量の角礫を含む土壌

で、生産力の高いスギ人工林として利用されている。

### 13 赤色土壌

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、うすい暗褐色のA層の下にくるB層は彩度・明度とも高く、5 YR またはそれよりも赤い色相をもっている。一般にA層の腐植含量は低く、B層は粘度化がすすみ埴質である。これに属する土壌統はいずれも洪積世の温暖期に形成された赤色風化殻を母材とするもので、三ツ間統は本図幅北緑の大井川本流に沿って形成された高位段丘上に、久奈原2統は大井川兩岸の標高400 m以下の山地の山頂部に分布し、茶園に利用されている。

### 14 黄色土壌

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、うすい暗色のA層の下のB層は5 YR よりも黄色の色相をもつものである。一般にA層の腐植含量が低く、B層は粘土化がすすみ埴質である。

これに属する土壌統のうち、大和田1統は細粒質段丘堆積物を母材とするもので、B層の下部(60 cm以下)には礫が多く含まれている。中位段丘上に分布し茶園に利用されている。上河内統は、固結堆積岩の再堆積性風化物を母材とするもので、山地斜面に分布し、茶園やミカン園に利用されている。福田1統は、固結堆積岩の残積性風化物を母材とするもので、山頂部に分布し、茶園やミカン園に利用されている。久奈原1統は、細粒質段丘堆積物を母材とするものであるが、地表下1 m以内のB層には礫の存在がほとんどみられないものである。河岸段丘(中位段丘)上に分布し、茶園、普通畑に利用されている。

### 15 暗赤色土壌

石灰岩または塩基性岩などを母岩とする土壌で、下層は5 YRの色相をもち、赤色土より明度・彩度とも低い土壌である。これに属する土壌統は千葉山1統、2統および青羽根2統である。千葉山1・2統は千葉山および岡部町青羽根付近に帯状に分布する蛇紋岩類を母岩とし、極暗赤褐色のA層と暗赤褐色のB層をもつ。そのうち、千葉山1統は尾根すじに分布し、乾燥破砕によって生成された独特な土壌構造をもつ乾性な土壌である。千葉山2統は1統の下側斜面又は沢すじに分

布し、角礫を含むボウ軟なA層、B層を形成する適潤性の土壌である。1統はヒノキ人工林、2統はスギ人工林として利用されている。青羽根2統は青羽根付近の沢すじに分布し、黒褐色のA層と埴質で暗赤褐色のB層をもつが、その下層にはしばしば斑紋がみられる。

## 16 褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に、黒褐、暗褐、褐、灰黄褐、黄灰色を呈するB層をもち、土性が中粒～細粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、中川根統は、石礫に富む扇状地堆積物を母材とするもので、山裾の小扇状地に分布し、茶園に利用されている。葛籠統は、細粒質河成堆積物を母材とするもので、大井川の河川敷の一部に分布し、茶園に利用されている。谷倉沢統は、細粒質河成堆積物が母材で、有効土層が浅く、地表下30cm位のところに砂礫層が出現する。狭い谷底低地に分布し、茶園、普通畑に利用されている。大代3統は、山間の低地における侵食谷の細粒質堆積物を母材とするもので、水田に利用されている。抜里統は、シルトが多い細粒質～中粒質の河成堆積物を母材とするもので、大井川の谷底低地の一部に分布し、茶園に利用されている。岸統と福用2統は中粒質河成堆積物を母材とするもので、前者は地表下80cm位から砂層が、後者は地表下40cmから礫層が出現する。谷底低地に分布し、茶園、普通畑に利用されている。神座統は、大井川ぞいの段丘面にみられるもので、水田、普通畑として利用されている。表層より30cmのところに礫層がみられる。

## 17 粗粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に黒褐色、にぶい黄褐色、オリーブ黒色などのB層を持ち、土性が粗粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、堀之内統は、粗粒質河成堆積物を母材とするもので、大井川の谷底低地に分布し、茶園に利用されている。中河内統は、粗粒質河成堆積物を母材とするもので、地表下30cm位から砂礫層が出現する。狭い谷底低地に分布し、茶園に利用されている。牛尾統と神尾統は、大井川の粗粒質河成堆積物を母材とするもので、前者は地表下55cmから砂礫層が出現するが、後者は砂層が比較的厚く、地表下1m以内に砂礫層の出現がみられぬものである。大井川の谷底低地に分布し、茶園やミカン園に



利用されている。

## 18 細粒灰色低地土壌

これは土性が細粒質で、土壌断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下 80 cm 以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統のうち、近又統は細粒質河成堆積物を母材とし、有効土層が比較的厚く、地表下 60 cm 位のところに礫層がくるもので、狭い谷底低地の一部に分布している。以前は水田であったが現在は茶園に転換、利用されている。横岡 3 統は、細粒質河成堆積物を母材とし、地表下 50 cm 以内のところに砂礫層が出現するもので、大井川扇状地に接する比較的広い谷底低地の一部に分布し、水田に利用されている。上向統と大代 2 統は細粒質河成堆積物を母材とするが、有効土層が薄く、前者は地表下 23 cm 位のところから礫層が、後者は地表下 20 cm 位のところから砂層が出現するもので、谷底低地に分布し、水田に利用されている。春野 1 統、横岡新田統は、細粒質河成堆積物を母材とし、比較的有効土層が厚いもので、前者は地表下 87 cm 位のところから礫層が出現するが、後者は地表下 1 m 以内には砂層の出現がみられない。谷底低地の一部に分布し、前者は水田に、後者は水田の転換によるミカン園として利用されている。春野 2 統は、小扇状地堆積物を母材とするもので地表下 23 cm 位から礫が多く鉄、マンガンの集積が顕著である。谷底低地の一部に分布し、水田に利用されている。地名 1 統は細粒質河成堆積物を母材とするが、地表下 25 cm 位から腐植に富む黒褐色の土層がくるものである。谷底低地の一部に分布し、水田として利用されている。大代 4 統は、山裾に形成された緩傾斜地の細粒質堆積物を母材とするもので水田として利用されている。長島統は伊久美川ぞいの低位段丘にみられるもので水田として利用されている。細粒質の河川はんらん堆積物よりなり、礫はみられない。谷稻葉 3 統は、瀬戸川などの小河川の低地に分布する。表層は細粒質、下層は砂質のところがある。この土壌では、湧水が表層より 10 cm のところにみられた。官原統は、瀬戸川など小河川ぞいの沖積のはんらん堆積物からなる低地にみられる。表層より 22 cm のところが礫層となっている。原統は瀬戸川などの小河川のはんらん堆積物のほか、山地・丘陵よりの崩積物が混在する。表層より 60 cm のところに礫層がみられる。停滞水によるグライ斑あり。

末広統は大井川下流のはんらん堆積物からなる低地に分布する。地表下 30 cm 位のところに礫層がみられる。「静岡・住吉」図幅の惣右衛門統に相当する。

## 19 中粒灰色低地土壌

これは土性が中粒質で、土壌断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下 80 cm 以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する土壌統のうち、横岡 1 統と横岡 2 統はシルトがない中粒質河成堆積物を母材とするもので、有効土層は比較的薄く、前者は地表下 40 cm 位から、後者は地表下 20 cm 位のところから砂礫層が出現する。大井川の扇状地の北端に接する谷底低地に分布し、水田に利用されている。

## 20 細粒グライ土壌

これは土性が細粒質で、地表下 50 cm 以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統のうち東山統は、固結堆積岩の細粒質風化物を母材とするもので、山地斜面の排水不良な凹地に分布し、水田に利用されている。大和田 2 統、大代 1 統および真砂 1 統はいずれも細粒質河成堆積物を母材として形成されたものであるが、大和田 2 統と大代 1 統は高い地下水位の影響で作土層直下にグライ層が出現する。前者は比較的有效土層が浅く、地表下 40 cm 位のところに砂礫層がくるものである。後者は有効土層が厚く、地表下 1 m 以内に砂礫層の出現をみないものである。真砂 1 統は、地表下 40 cm 位のところからグライ層が出現する。上記の各土壌統は、谷底低地に分布し、水田として利用されている。

(近藤鳴雄・縣富美夫・浜田竜之介)

## Ⅳ 傾斜区分図

傾斜区分は山地、丘陵などの地形的特性によってその分布が支配されるが、本図幅では特に一般的傾向を把握することは困難である。山頂部に緩傾斜部や平坦部が比較のおおく残るために、傾斜の変換である急傾斜部が帯状につらなっている。40度以上のS7は河川の峡谷部、段丘崖部、河川の側刻部などにあらわれ、線状に分布するが面積的には広くない。大起伏山地をもつ北部にはS6(30°~40°)が広く分布するが斜面崩壊の発生しやすい条件ともなっており、水系の谷壁斜面にそってもこの分布がみられる。しかし山地の単位が小さく斜面形の変化がはげしいために同一の段階が広範囲にひろがる例はすくない。山系や水系が一般に北東-南西方向につづくためにその方向性は区分の分布にもあらわれ、標高区分の等高線もその傾向を示しているといえるし、閉曲線の部分は緩傾斜部となっている。図幅の南部は標高もひくく、地形も小起伏山地、丘陵、台地の面積が広がるために傾斜もゆるくなり、丘陵では谷密度は大きくなるが、全体的に平均化された傾斜区分となって表現されてくる。

図幅のほとんどを山地がしめているために緩傾斜部は局地的な分布となり、谷底にそう緩傾斜のS1~S2が山間に侵入するが、谷壁が急斜面であるために、漸移的移行ではなく、傾斜の急変が特色ともいえる。山地の傾斜は山くずれや崩壊の発生との関連で注意する必要がある。しかし、その分布との関係をみても特に表現されている範囲での重なりあいはこの縮尺では十分でなく、図に表現できない局地的因子がさらに強く作用していることも想像される。崩壊発生が地形分類図からは稜線部や緩斜面周辺に集中していることから表現の工夫が必要となってくるといえる。

## V 水系谷密度図

本図幅にふくまれる水系は大井川、瀬戸川とその支流が中心で、周辺に気田川、太田川、原野谷川、朝比奈川などの流域が若干ふくまれる。大井川は南北方向に流路をとり島田でやや東方に転向するが、曲流と幅の広い河床は送流物質や供給土砂量の多い大きい性格と、地質構造に左右された特性とをあらわす。大井川に流入する支流である笹間川、身成川、伊久美川、相賀川は北東—南西方向の流路をとってほぼ平行して流れるが、西方から流入する家山川、大代川は地質構造と斜交する方向をもつ。瀬戸川もほぼ南北方向の流路をとり、朝比奈川、滝沢川、葉梨川などはその支流であるが規模は小さく、流路は構造に支配される。

支流や水系の発達には地層を構成する岩石の性質や構造線、断層等によって変化を与えられるが、小河川でも曲流や峡谷をもつ場合もおおく、その侵食の旺盛さや流量のゆたかさを知らされる場合もおおい。大井川は広い河床内を網状に流れるとともに下流に形成した扇状地内でもかつては自由に流路をかかえたあとが旧河道の存在によっても理解できる。大代川をはじめ、河川改修によって短縮化した例もおおく、人工河川化の傾向は大きい。また笹間ダムをはじめ、防災ダムとして原野谷川大代川にダムが構築され、その面での人工的改変もすすんでいる。

水系網について特色を一般化するのは困難であるが、源流部ではいずれも樹枝状のパターンをもち、山地を開析している。そして源流部の水系は斜面崩壊とともに土砂が運搬され、土石流堆積物におおわれる例もみられる。地質的特性によって河状が規制される例として重要であろう。また笹間川、身成川、伊久美川は曲率の高い蛇行を示し、やはり流路の特性といえる。また直線的な流路をとるものとして相賀川、大津谷川などがある。特別な例として瀬戸川上流と伊久美川支流大久保川との分水界にあたる蔵田付近は河川争奪と考えられる流路変遷の地形もあり詳細は不明であるが問題の地点である。

谷密度は地域差が大きく、相関が求めにくい。丘陵性は小支谷が発達してひだのおおい地形を示すため40～50の値をもつ。山体の大きさによっても計測の方法から地形と相関の十分にあらわれないと思われる場合もある。平野部では人工的水

路の発達が表示されている場合に大きな値をもつ例もあるが内容的に検討が必要であろう。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
A	30	22	37	28	25	25	14	21	36	21	24	25	30	26	29	24	27	28	32	36
B	24	32	37	38	33	39	15	12	30	34	23	23	25	27	26	32	33	34	37	36
C	25	36	40	31	28	23	9	21	40	32	19	28	24	31	27	26	21	34	32	43
D	38	38	30	27	27	37	13	15	25	29	34	34	34	25	28	21	20	26	28	44
E	36	30	35	25	30	39	27	18	33	32	40	32	25	21	23	34	29	29	32	35
F	30	26	30	32	38	33	30	16	30	39	34	30	26	28	26	18	26	31	27	41
G	29	28	34	36	34	31	24	21	33	32	37	32	30	28	29	27	27	20	32	34
H	31	36	35	32	34	18	17	23	33	33	33	39	23	21	32	24	25	29	38	40
I	33	33	32	27	42	24	18	20	29	34	28	27	26	21	24	28	27	34	32	35
J	41	31	24	35	35	23	25	21	25	27	22	31	23	30	26	28	28	38	32	35
K	30	30	40	31	35	30	27	20	17	20	29	44	31	37	37	29	27	29	35	28
L	32	41	42	38	28	26	26	16	18	26	30	32	32	42	37	29	24	29	34	30
M	31	32	32	33	36	31	33	14	10	20	26	30	28	39	32	39	31	28	37	22
N	34	35	32	24	35	29	27	22	7	13	28	30	24	32	35	39	35	27	33	25
O	36	27	35	36	34	25	24	27	10	12	31	29	42	43	36	32	31	28	37	35
P	29	23	33	35	29	28	37	34	16	18	28	26	47	40	40	42	32	25	10	13
Q	44	24	35	34	27	30	25	32	18	17	22	23	27	37	26	37	39	33	25	14
R	31	25	37	45	56	22	32	25	24	11	11	25	23	39	20	35	28	23	36	21
S	34	24	38	50	49	38	32	30	20	6	0	23	15	41	30	29	29	28	20	3
T	34	39	42	46	44	29	27	28	24	12	2	44	14	14	16	18	11	12	11	8

(北川光雄)

## Ⅵ 土地利用現況図

### 1. (農地)

本図幅中で赤石山地の南西縁をなす志太・春野山地を南北に流れる大井川の両岸の山地斜面と山地の裾の各所に形成されている河岸段丘や小扇状地に分布する農地はほとんどが茶園として利用されているが、志太・春野山地の南端とその下方に続く島田市、金谷町および掛川市に属する一部の山麓地斜面に分布する農地は、茶園のほかにミカン園としての利用もみられる。大井川の流れとほぼ平行して大井川東岸の志太・春野山地を南北に流れる瀬戸川・葉梨川流域の山地とその下方に続く藤枝市に属する山麓地の斜面に分布する農地は、ミカン園と茶園に利用されているが、概して茶園よりもミカン園としての利用の方が多くなっている。大井川、瀬戸川、葉梨川および原谷川とそれらの支流によって志田、春野山地とその山麓地に形成された谷底低地に分布する農地は、主に水田として利用されているが、排水状態のよいところでは茶園、ミカン園としての利用もみられる。山麓地の南縁に接する大井川の扇状地性低地に分布する農地は水田としての利用が主であるが、大井川西岸の金谷町五和地区では一部にミカン園、茶園としての利用がみられる。また、国道に沿った大井川扇状地性低地の部分は、最近著しく市街地化がすすみ、農地の宅地、商工業用地への転用が増加している。

(近藤 鳴雄)

## 2. (林 地)

本図に含まれる林地は、大井川西側の春莖山(941 m)から八高山(832 m)を経て粟ヶ岳に至る山麓と、大井川と瀬戸川との間の図幅中央上部の高根山(871 m)から菩提山(677 m)を経て千葉山(496 m)に至る山麓と、瀬戸川東側の山麓に大別され、図幅上部、及び大井川西側はスギ、ヒノキ、主体の人工林地が多く、図幅中央より東、及び下部は茶園地が散在した林地となっている。

大井川西側山麓の上部はスギ、ヒノキを主体とした人工林が多いが、春莖山から東斜面は、針葉樹林と広葉樹林が混在している。中央の大日山より東斜面は、針葉、広葉樹林と茶園がモザイク状に散在している。八高山より下部は、国有林を中心に人工林が多くみられるが里山地区は茶園と人工林が混在している。

図幅中央の大井川と瀬戸川との間の上部山麓、林地は、針葉、広葉樹林が混在しているが、里山地区特に瀬戸川添いは茶園地との混在が著しい。また竹林も多く分布している。伊久美川を中心とした地域は、広葉樹主体の林地が多い。千葉山南斜面はスギ、ヒノキの人工林の間に茶園地が多く散在した林地となっている。鳥帽子山周辺は市街地に近いこともあって宅地開発が著しく進んでいる。

瀬戸川より東斜面山麓の林地は、全地域とも人工林地と、茶園、みかん園がモザイク状に混在している。また竹林が葉梨川添に多くみられる。

(渡 辺 光 男)

## 森 林 概 況

市町村名	林 野 総面積	民 有 林						国有林
		総 数	人工林	天然林	竹 林	原 野 その他	人工林率	
静岡市	95.142	90,352	36,197	47,701	450	6,004	40 %	4,790
藤 枝 市	5.889	5,889	3,386	2,156	288	59	58	
島 田 市	7.026	7,024	3,867	2,937	160	60	55	2
掛 川 市	9.460	9,123	6,627	2,282	123	91	73	337
岡 部 町	3.312	3,312	2,165	803	300	44	65	
金 谷 町	3.640	2,748	1,640	1,006	68	34	60	892
川 根 町	10.618	10,618	7,637	2,869	21	91	72	
中川根町	10.814	9,409	7,217	2,002	52	138	77	1,405
森 町	9.695	9,395	7,070	2,267	24	34	75	300
春 野 町	23.268	17,406	14,009	3,286	19	92	81	5,862
計	178.864	165,276	89,815	67,309	1,505	6,647	54	13,588

※注 1. 各市町村の全域（図幅外も含む）を示す。

2. 県林政課地域森林計画



1982年2月

印刷発行

土地分類基本調査

# 家 山

編集発行 静岡県農地森林部農地企画課  
静岡市追手町9番6号

印刷 株式会社 静清タイプ  
静岡市相生町11番17号